〈研究ノート〉

# 卒業制作展に見る日本、アジアの大学比較

道　田　　健

## 1. はじめに

デザインを学んで来た学生にとって卒業制作（以下、卒制と表記する）は学業の集大成として、社会人になる前にアマチュアとして最後の成果物を発表する場である。学内で展示を行うにしても一般公開され、より多くの人々に自分の作品を見てもらえるチャンスである。学んだ知識と技巧を注ぎこみ、大学の最終学年にテーマ設定から作品の制作まですべて行う極めて自由度の高い取り組みであり、創作活動をすべく入学してきた学生には魅力的なはずである。しかし筆者が学生を指導する中で、テーマ設定に悩む学生、就職先も決まり努力する価値を見出せなくなっている学生があまりにも多いことに気づいた。その原因を探るために筆者が他校の卒業制作展（以下、卒展）を出来るだけ見に行くようにし、機会があれば他校の教員や学生にも話を聞いている。まだ多くの卒展を見に行くようになって3年であるが、筆者が教鞭をとる大阪芸術大学デザイン学科プロダクトデザインコースの運営方法の改善を考察することが本稿の目的である。

今回の執筆にあたって卒展視察を行った大学（院）を以下にあげておく。

2015年度
大阪芸術大学、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、名古屋芸術大学、愛知県立芸術大学、愛知産業大学

2016年度
大阪芸術大学、大阪工業大学、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、京都精華大学、名古屋芸術大学、愛知県立芸術大学、愛知産業大学、名古屋工業大学、大同大学、情報科学芸術大学院大学、千葉大学、yodex（台湾の合同卒展、5月）、弘益大学（ソウル、11月）

2017年度
大阪芸術大学、神戸芸術工科大学、京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、京都造形芸術

大学、京都精華大学、名古屋芸術大学、愛知県立芸術大学、東京藝術大学、千葉大学、多摩美術大学、武蔵野美術大学、昭和女子大学、金沢美術工芸大学

## 2. 卒展の時期と場所について

どこの大学でも年度末の１月～３月に卒展は行われている。学内展と学外展の両方を行う大学は、学内展を１月後半～２月前半に行っている。学外展はその後、３月上旬までに行われている。4 年間の学業を締めくくる成果発表として、学外展は公共の美術館や都会のギャラリーなどで行われる。学部やコースの主導で開催される場合は、作品の公開だけでなく、集客を見込んだ広報活動の役割も果たしている。しかし学生主体の学外展開催は、費用も準備も自己負担であるために、その運営が大変であることは想像に難くない。視察を行った大学の学生たちは多くの人に見てもらうために、先輩たちから受け継がれてきたマニュアルと格闘しながら必死になって学外展を開催している、というのが現状である。

## 3. 学内展と学外展について

学外展と一言で言っても大きくは次の３パターンに分けられている。(2017 年度)
①学内展をしてから学外展をする大学（学内の内覧会は除く）：昭和女子大学、武蔵野美術大学、千葉大学
②学外展一本の大学（学内の内覧会は除く）：神戸芸術工科大学、京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学、大同大学
③大学内外で行うミックス開催：東京藝術大学、多摩美術大学

美術館やギャラリーでの開催のメリットは、会場が作品展示を前提とした空間なので見栄えがすることである。また美術館やギャラリーなどでは大学関係者以外にも普段から芸術に親しんでいる客層もおり、場所が来場者にもたらす心理的効果も無視できない。学外展では学生の作ったものが、専用の展示空間に置かれることによって「芸術作品」として受容されやすい。学生の側から見ても美術館に自分の作品が並ぶということが制作の動機づけになっている場合が多い。東京、名古屋、京都などの美術・芸術系大学の多い地域では、学生たちは他大学がどこで卒展を行っているか、を知っている。同じ地域の同等のレベルに認識されている大学の学生同士は互いにライバル意識があり、これが互いの作品、展示のレベルを上げるのに一役買っている思われる。

金沢美術工芸大学の場合は周囲にライバル校と言えるほどの大学はないが、学生達の卒展にかける意気込みには驚くべきものがある。確かに金沢 21 世紀美術館という立地にも空

間にも恵まれた場所での開催だが、彼らは先輩達から展示のノウハウが伝授されており、11月の審査以降は2か月以上にわたって卒展の準備に専念している。伝統的に良い卒展にすることは当然といった意識があり、会場にいた学生に話を聞いても、「他校のことはよくわからないが、先輩たちに負けたくない気持ちはある」と言っていた。競争相手が他校の同学年ではなく、同じ大学の先輩たち、というのは非常に興味深い。また他にも同大学の特徴として、作品のモデル、解説パネルはもちろん、コースのカタログも作っていた。ここまでは他校でも行っているが、オリジナルの取り組みとして全員がプロセスブックと称する小冊子を作っていた。1年間の研究過程をファイルにして、展示しているのは大同大学（愛知）や大阪工業大学でも見られたが、全員が装丁に基準を作り、わかりやすく魅力的な個別の冊子を作成しているのは金沢美術工芸大学だけであった。

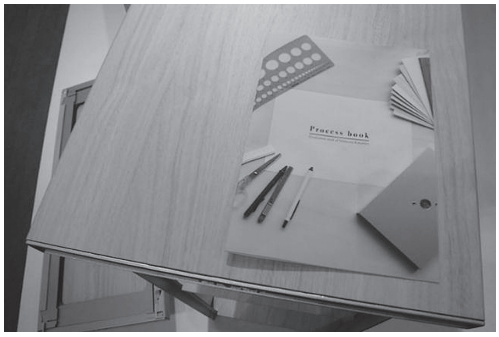

写真1　プロセスブックの表紙例

写真2　プロセスブックの内容

卒展作品は学生の作るものであるがゆえに、作品の出来は良いものからそうでないものまであり、中には残念ながら全体の印象を押し下げている作品も見受けられる。2016年度の卒展まで愛知県立美術館ギャラリーで開催していた名古屋芸術大学（北名古屋市）は美術館ギャラリーでの展示にふさわしくないと判断された作品群は学内展示にするなど、卒展の一括展示をしないことで美術館での展示レベルを維持していた。しかし、愛知県立美術館ギャラリーが改装中で使えない、という理由で2017年度の卒展より学内展に一本化するようになる。美術館の改装後の2018年度以降も大学内での開催を継続するとのことで、翌年以降も使えるような展示台を大量に作っていた。特に目を引いたのがスペースデザインコースの展示空間である。それは単に展示台を置いた空間ではなく、展示空間そのものが計画的に作り出されている。例えば壁面の裏表が見えるように床から天井までの袖壁を作ったり、背の高い展示ブースを設営し視線をコントロールすることにより、作品がより魅力的に見えるように工夫をしていたり、展示空間の間の通路に在学生の作品を展示するなど、展示に関する工夫はトップレベルにあった。美術館に比べて複雑な空間になるために会場にいるスタッフの学生数も比較的多く、説明を聞きやすかった。

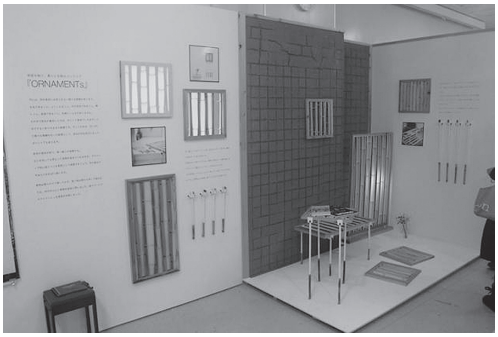

写真３　展示のために壁面と作品を一体化

写真４　制作プロセスを展示する大きな台

写真５　学生たちで展示空間を作り上げている

写真６　教室を改装した展示空間

これ以外にも愛知県立芸術大学や京都精華大学が2017年度から、京都市立芸術大学が2018年度から卒展を学外展から学内展に移行したのは注目すべきであろう。愛知県立美術館と京都市美術館が改装のタイミングで学内展に移行するのは共通であるが、3校とも美術館に戻る予定はないとのことで、美術館から学内展への流れがはっきりと窺える。一方で、ギャラリーや商業施設で学外展を開催してきた大学はどこもそのまま継続のようである。美術館で開催しなくなった一つの理由は学部単位の卒展には会場規模が大きすぎることが考えられる。少子化による専任教員の減少という問題も複数校の教員より聞くことが出来た。卒展に関わる機会が卒業年度以外にないため、学生間での引継ぎがしにくいことも大いに影響していると思われる。

京都工芸繊維大学大学院（会場、京都文化博物館）や千葉大学（会場、東京デザインセンター）では多くの場合、作品の横に作者がおり、来場者に丁寧に説明する姿が印象的であった。モデルやパネルといった作品に関する展示物の情報量を多くする替わりに来場者に個別の説明を行うことで作品の理解に努めていた。作品の解説パネルは他校に比べ小さく、内容も乏しいため、説明を聞かないと理解しにくいものもあったが、作者からの説明を受けることによって研究の背景も制作の熱意もよく伝わり、来場者の満足感は確実に増すように思われる。ただ、来場者の中には時間がない人もいるはずなので万能な方法はないのであろう。

## 4. 海外の卒展

日本の卒展を多く見始めた2017年度の前期に韓国からの交換留学生を指導したのをきっかけに海外の卒展を見に行くようになった。授業の合間に行くので距離と時間を考慮し、中華民国（以下、台湾と表記する）でデザインを教える大学の合同卒展（yodex: young designers' exhibition）と大阪芸術大学の提携校である韓国の弘益大学（Hongik University)の卒展を視察に行った。

### 4-1. yodex：

5月に台北にある台湾ワールドトレードセンター（TWTC）にて、全国から60校以上、海外からも数校が参加し、全部で70校以上の大学が集まり卒展を行っている。

公式サイト（http//www.yodex.com.tw）によると4日間で10万人の来場者があるとのことで、「世界で最大の学生デザインイベント」としてギネスブックにも載っている。注目すべきは主催が台湾の「経済部」（日本で言う経済産業省）という点であった。学生作品だけでなく、大学をプレゼンする場でもあり、ブースの作り込みなど企業の国際見本市にも劣らないくらいに造作に予算をかけている印象を受けた。作品のレベル、特にモデルの仕上がりは全般に素晴らしく、ほとんどの大学ブースでは大型モニターで作品や大学のプロモーションムービーを流しており、受付では作品集やオリジナグッズの販売を行っていた。

写真7　yodex 会場風景1

写真8　yodex 会場風景2

大学ごとに企業スポンサーもつけているところが多かった。大半の大学で作品の横に作者が立っており、丁寧な解説を聞くことが出来た。しかも驚いたことに多くの学生が英語で対応可能であり、始めは中国語で話しかけてくるものの、中国語が通じないとわかると瞬時に英語に切り替わることが何度もあった。また英語ができない学生の隣に英語のできる学生を置くのが当然と考えているようで、この点が作品の仕上がりに負けないくらいの満足感を与えてくれた。約70校分の学生と教員を合わせたスタッフだけでもそれなりの人数であるうえに、何台もの観光バスで高校生が各地から来ており、お祭りのように賑やか

で、人目を引く作品を作った学生はさながらスターのように来場者に囲まれてプレゼンしているのも印象的であった。頑張れば報われる場が設定されていることも学生が努力して、作品を作る理由になっているようであった。会場はさながら大学の見本市会場のようで、このようなことは日本の作品展では起こらないことである。各校の作るカタログも非常に立派なものが多く、実践大学（Shih Chien University）のものはハードカバーの辞書のような厚みで本文表記が二か国語である。しかも始めに英語で、その次が母国語という順序で、狭い国内ではなく国外で通用する人材育成を目指しているのが良くわかる。

写真 9　人気のある作品は常にプレゼン中

写真 10　人が多く、見るのにも一苦労

### 4-2. 弘益大学（Hongik University）：

同大学はソウルで私学トップ校の一角を占めている。卒展は 11 月に学内のギャラリーで開催される。興味深いのはコースごとに週替わりで卒展を行っていることで、大学として見てもらおうというよりはコースごとに深く知ってもらいたいようである。学内開催ではあるが、大学付近は若者の集まるスポットになっており、常に多くの人たちでにぎわっている。東京で言うと渋谷のセンター街か原宿に大学があるようなイメージで、正門前は深夜まで人通りも多く、卒展の来場者数も昼間より夕方からの方が多いとのことである。展示自体は 20 時まで開場しており、学内に入る、という手間はかかるものの街中のギャラリーのような役割も果たしている印象を受けた。またソウル最大級の画材店が学内にあり、学外の一般の人も買うことが出来るようになっている。このような立地を生かした取り組みも大学に入りやすい雰囲気を高め、来場者の増加につなげている。終業後には社会人も来るので昼間よりは夕方以降の方が賑わうようで、作品を制作した学生たちも時間が遅くなるにつれて増えていき、来場者に解説を行っていた。会場内の展示自体は特に際立った特徴はなく、作品点数からすると決してゆったりとした空間ではなかった。興味深かったのは、後輩たちが気に入った作品や好きな先輩の作品の横にラッピングされたお菓子や、コメントを付箋に書いて残していたことである。会場の入り口には OB の紹介パネルがあったり、企業からの花輪が飾られていたりするのも日本では見かけない光景であり、社会で活躍する先輩たちに仲間入りする卒業生を歓迎するかのような演出にも見えた。

写真 11　受付横には花輪

写真 12　入り口前の OB 紹介とインスタレーション

### 4-3. 卒展における日本と台湾、韓国の違いについて

就職活動時期の違い、社会の求める人材像、規模感などの違いにより、台湾、韓国と日本の卒展は相当異なった性格を持っている。台湾の場合は 5 月に卒展、その後の 2 か月間が主な就活シーズンとなっており、韓国でも 11 月が卒展シーズンでその後の 3 か月が主な就活シーズンとなっている。これらの国が日本と比べて決定的に違う点が「卒展を終えてから就活に入る」ということである。日本での卒展が学生生活最後の記念碑的行事になるのに対して、これらの国では就活のツールとして作品を作り、企業の目に留まる作品を作った学生はその場で、名刺交換をして面接を受けに行くなど、卒制が仕事を獲得する手段になっている。ゆえに将来の仕事を獲得するために、モデル制作費を日本円で何十万もかけて外注することは両国の学生ともに共通している。多くの来場者に対して大学とのタッチポイントを増やそうとしている点は日本の大学も似てはいるが、大学、学生ともに予算のかけ方では日本のそれを相当上回っているのは間違いない。

海外の卒展はまだ 2 か国しか見ていないが、一見して日本より全体的なレベルが高い印象を受ける。見に行った大学のレベルも影響しているのであろう。しかし出展者全員ではないにしろ、スケッチ力はプロ級、3DCAD も出来て当たり前、英語は出来ないと大手に相手にされない。さらに弘益大学の学生は半数以上が休学して、企業のインターンとして実践経験を積んだり、海外留学で語学を学んだりしていることからみると、日本よりもはるかに高い即戦力が学生には求められているようであった。日本はまだまだ入社してから企業が人材を育てるという意識が根強く、一概にどちらが良いとは言えないが、台湾、韓国の学生が置かれている環境を見て精神的な強さ、たくましさを感じざる得なかった。

## 5. まとめと展望

日本国内では学内展重視への流れは感じるものの、来場者に大学を知ってもらうという

規模の大きな話と、作者が展示会場で丁寧さと細やかさでもって来場者に理解と満足感を得てもらうという小さな試みが混在している。しかし、卒展が作品を展示する場として学生の個性と教育による成長結果のプレゼンテーションだけに留まらなくなってきていることははっきりしている。今後は、教育を通した成長過程、進学を控えた世代には疑似的な大学体験とでも言うべきことが伝わるように卒展をデザインしていかねばならない。入学から卒業までの作品制作を通した学生の成長を可視化することにより、大学で出来ることを明確にすることが来場者の期待に応えることになるであろう。

写真 13　京都市立芸術大学の在学生展

写真 14　名古屋芸術大学の課題紹介と作品例

教育面に目を向けると、学生が日々生み出す成果を他の学生や大学関係者以外にも見てもらえるような環境を整えることが重要と思われる。本学デザイン学科プロダクトデザインコースでは今回記したような他校の動向を調査し、学びの場と卒展の改革を始めている。学年によって学生同士の団結力や能力も異なるが、学生たちにとって大学での学びと卒展の経験が社会に出る前の最後の良き機会になるように引き続き調査を行っていきたい。